

ふるさと考 ～ある高校生の夢～

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
天野 和彦 氏

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター
特任准教授



私 が生まれたのは、実は北海道の室蘭市である。しかし、生まれてわずか3カ月ほどで父親の故郷である福島県の会津若松に移り住んだ。このことをその都度説明することに面倒を感じていたため、私はプロフィール上では、会津若松市出身としてきた。「実は」と前置きしたのはそのためである。

大人になってから、初めて生まれた場所(生家)に行った時は潮を含んだ空気に包まれているのを感じて、生まれたばかりの私もこの空気を吸っていたのかと感慨深かった。こうした経験を通して「ふるさと」の持つ意味を考えたのを今も思い出す。

しかし東日本大震災後、この「ふるさと」という言葉に何度も鋭く向き合わざるを得なかった。21世紀のこの日本で、東北は福島で、この瞬間にもふるさがなくなるかもしれない状況を抱えている人たちがいる。強制避難を余儀なくされた町の一つ富岡町には、県立富岡高校がある。スポーツが盛んなエネ

ルギー溢れる高校だ。震災後、そこに通っていた高校2年生(17歳)の女子生徒の話聞くことになった。彼女は、「私には夢があります」と言った。いったいどんな夢なのか。

「3月11日の午後2時46分、私たちはちょうど授業中でした。教室を突然激しい揺れが襲い、椅子に座ってられない状態でした。先生が大声で『早く机の下に隠れなさい!』と叫びました。私たちは机の下に潜ったものの、強い揺れのせいで、机はどこかに吹き飛んでしまって、頭を守るものは何ともありませんでした。いったいこれからどうなるんだろうと思ったその時、一瞬揺れが止まりました。先生がまた大声で『早く校庭に逃げろ!』と叫ぶと、私たちは一斉に校庭に逃げました。それからもう二度と、私たちは教室に戻ることはできませんでした。だから、私の夢というのは、いつか必ずあの教室に戻って、あの時、私の机の上に開いてあった私の教科書、私のノート、そして筆箱から出していた私の鉛筆……それらを私の手で、教科書とノートを閉じ、鉛筆を筆箱に戻してあげたい。それが私のけじめだと思うし、それが私の夢なのです」。

私はもう胸がつぶれそうだった。これが17歳の若者が持つような夢なのか。本来ならどういう夢を持つのか……憧れのタレントに会ってみたいとか、いつか好きな人ができて一緒に暮らすことができたとか、こんな仕事に就くことができたらいいな、などと空想したり想像したりする、それが若者の夢なのではないのか。いつか教室に戻り、震災の時のまま散らばっている教科書やノートを閉じる、鉛筆を筆箱に戻す、それが夢だという彼女の話に、「ふるさと」がなくなるというのはこういうことなのだと胸に強く刻んだ。

「ふるさと」というのはいったい何か、これからも問い続けていく。私たちは、私たちのふるさとをそう簡単にあきらめるわけにはいかない。



震災時のまま、教科書やノートが散乱している富岡高校内の教室



仮置き場には、除染廃棄物を入れたフレコンバッグが積み上がっている